

天草諸島方言の多様性

—御所浦島方言・獅子島方言の動詞テ形音韻現象—

有元光彦

Diversity of the *Amakusa Islands* Dialects
—*Te*-form Verb Phonological Phenomenon in the
Goshoura-jima and *Shishi-jima* Dialects—

ARIMOTO Mitsuhiko

(Received September 26, 2014)

1. はじめに¹

本稿の目的は、天草諸島の一部である熊本県・御所浦島方言、及び鹿児島県・獅子島方言の動詞に起こる「テ形音韻現象」を記述すること、さらにこの記述をもとにして天草諸島方言の多様性の要因を探ることにある。

テ形音韻現象とは、有元光彦（2007a, 2007b）等と言うところの特異な形態音韻現象である。テ形音韻現象は次のように定義されている。²

(1) テ形音韻現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言Δにおいて、＜書いてきた＞を [kakkita] というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は *[tokkita] とは言えず、[tottekita] という [te] が現れる形しか存在しないとする。このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、方言Δはテ形音韻現象を持つと言う。

本稿では、御所浦島方言、及び獅子島方言のテ形音韻現象を記述するとともに、新たな方言タイプ、及び「共生タイプ」が発見されたことを示す。

¹ 本研究の一部は、平成23～25年度・独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」（No.23520554）、及び平成26年度・同・基盤研究（C）「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基づく方言形成シナリオの構築」（No.26370540）によるものである。調査においては、各自治体の教育委員会・公民館、及び多くのインフォーマントの方々大変お世話になった。記して感謝する次第である。

² 「テ形音韻現象」という名称は、以前の拙論では「テ形現象」と呼んでいたものである。有元光彦（2010b）以後この名称に改めている。内容は変わっていない。

2. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論 (Generative Phonology) の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形 (underlying form) に音韻ルール (phonological rule) が線的 (linear) に適用されることによって、音声形 (phonetic form) が派生される。基底形は、心内辞書 (mental lexicon) に登録されている辞書項目 (lexical item) が形態的操作によって組み合わされたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成 (基底形) は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞：

/kaw/ <買う>, /tob/ <飛ぶ>, /jom/ <読む>, /kas/ <貸す>, /kak/ <書く>, /kog/ <漕ぐ>, /tor/ <取る>, /kat/ <勝つ>, /sin/ <死ぬ> など

b. 母音語幹動詞：

/mi/ <見る>, /oki/ <起きる>, /de/ <出る>, /uke/ <受ける> など

c. 不規則語幹動詞：

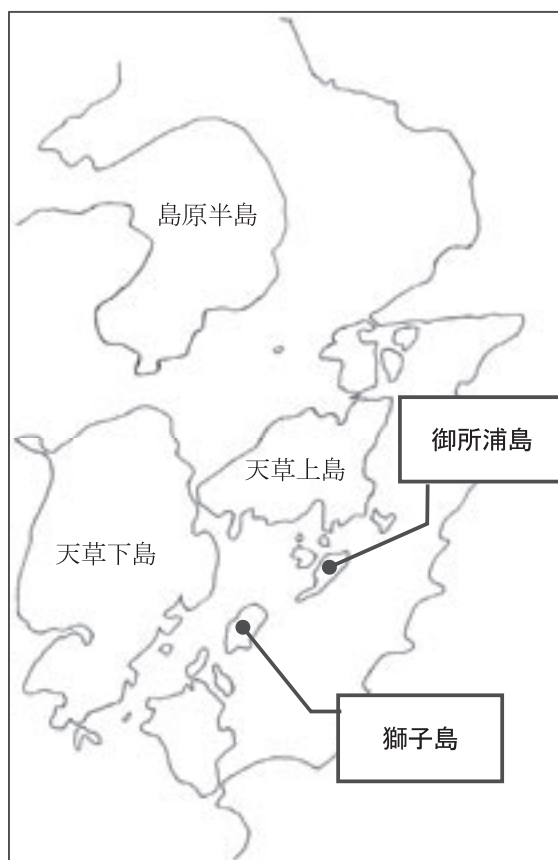
/i/ ~ /it/ <行く>, /ki/ <来る>, /s/ <する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて /te/ である。また、テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば、[kita] <(〜)きた>, [kure] <(〜)くれ> 等である。

3. データ属性

本稿で挙げるデータは、平成24 (2012) 年9月、及び平成25 (2013) 年9月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、熊本県天草市御所浦町 (御所浦島)、鹿児島県出水郡長島町 (獅子島) である (地理的な位置は【図1】を参照)。



【図1】 地理的な位置

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号*はその音声形が不適格であることを、記号?*はやや不適格であることを、記号?は少し違和感があることを、それぞれ表す。また、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることを、記号&はインフォーマントが聞いたことがある（使用しない）と回答していることを、記号¥はインフォーマントが古い形である（使用しない）と回答していることを、それぞれ表す。また、記号-----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音 (stem-final segment) が α である動詞を「 α 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/ <書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「i₁, e₁語幹動詞」は、語幹が1音節であるi, e語幹動詞を、「i₂, e₂語幹動詞」は、語幹が2音節以上のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

4. 分析

本節では、御所浦島方言及び獅子島方言のテ形音韻現象について、言語データを挙げつつ考察する。

4. 1. 御所浦島方言

本節では、熊本県西部の御所浦島方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、インフォーマント2名分（仮に「A氏」「B氏」と呼ぶ）の言語データを【表1】に挙げる。

【表1】御所浦島方言の動詞テ形

語 幹	A 氏	B 氏	意 味
kaw <買う>	kokkita ko:tʃikita	kokkita *ko:tʃikita	買って来た
tob <飛ぶ>	tokkita to:tʃikita	tokkita *to:tʃikita	飛んできた
jom <読む>	*jokkita *joŋkita jo:tʃikita	jokkita *joɕikita	読んで来た
ogam <拝む>	ogokkita ogo:tʃikita	-----	拝んできた
kas <貸す>	kjakkita kja:tʃikita	kjakkita *kja:tʃikita	貸して来た
kak <書く>	kjakkita kja:tʃikita	kjakkita *kja:tʃikita	書いて来た
kog <漕ぐ>	kekkitita ke:ɕikita	kekkitita *ke:tʃikita	漕いで来た

tor <取る>	tottekita *tokkita *tottjikita	tottekita *tokkita *tottjikita	取ってきた
kat <勝つ>	kattekita *kakkita *kattjikita	kattekita *kakkita *kattjikita	勝ってきた
sin <死ぬ>	ʃindekureeba *ʃiŋkure *ʃindʒikure	ʃindekure *ʃiŋkure *ʃindʒikure	死んでくれ (れば)
mi <見る>	mittekita *mittekita *mikkita mitʃikita	mittekita *mittekita *mikkita *mitʃikita	見てきた
oki <起きる>	okitekita okittekita okikkita ?okijikita	okitekita okittekita *okikkita *okijikita	起きてきた
de <出る>	*dettekita dekkita detʃikita	*dettekita dekkita *detʃikita	出てきた
uke <受ける>	*ukettekita ukekkita uketʃikita	*ukettekita ukekkita *uketʃikita	受けてきた
i ~ it <行く>	*itekita itakkita itatʃikita	ittekita *ikkita *itʃikita itakkita	行ってきた
ki <来る>	kitekurenkai *kikkurenkai kitʃikurenkai	kitekure *kikkure *kitʃikure	来てくれ (ないか)
s <する>	ʃitekita *ʃikkita *sekkita ʃitʃikita	ʃitekita *ʃikkita *sekkita *ʃitʃikita	してきた

【表1】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、【表2】のような分布をしている。記号Qはいわゆる促音を表す。<行く>欄の記号—は、別の語幹を使用することを表す。

【表2】 御所浦島方言のテ形音韻現象の分布

	御所浦島方言			
	A 氏		B 氏	
kaw <買う>		Q	tʃi	Q
tob <飛ぶ>		Q	ɕʃi	Q
yom <読む>		Q	ɕʃi	Q
kas <貸す>		Q	tʃi	Q
kak <書く>		Q	tʃi	Q
kog <漕ぐ>		Q	ɕʃi	Q
tor <取る>	te			te
kat <勝つ>	te			te
sin <死ぬ>	de			de
mi <見る>	te		tʃi	te
oki <起きる>	te	Q		te
de <出る>		Q	tʃi	Q
uke <受ける>		Q	tʃi	Q
i ~ it <行く>	—	—	—	te
ki <来る>	te			te
s <する>	te		tʃi	te

【表2】の子音語幹動詞及び母音語幹動詞の分布をまとめると、【表3】のようになる。

【表3】 御所浦島方言の子音・母音語幹動詞の分布

	A 氏	B 氏
[te], [de]	/r, t, n, i ₁ / のとき	/r, t, n, i ₁ , i ₂ / のとき
促音	/w, b, m, s, k, g, i ₂ , e ₁ , e ₂ / のとき	/w, b, m, s, k, g, e ₁ , e ₂ / のとき
[tʃi], [ɕʃi]	/w, b, m, s, k, g, i ₁ , e ₁ , e ₂ / のとき	(なし)

【表2, 3】から分かることは、A氏においては、「テ」「デ」に相当する部分に3種類の音声が見られている。特に、促音及び [tʃi], [ɕʃi] が現れていることは、「共生タイプ」であると考えられる。

ここで、子音語幹動詞だけを観察すると、促音はA, B両氏で見られるので、次のようなルールを設定できる。

(3) e 消去ルール (御所浦島方言) :

語幹末分節音がXでない動词语幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

$$X=/r, t, n/$$

(4) e/i 交替ルール (御所浦島方言 (A氏のみ)) :

語幹末分節音が X でない動词语幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /e/ を /i/ に交替させよ。

$$X = /r, t, n/$$

一方、母音語幹動詞においては、r 語幹化 (う行五段化) の現象が関連する。この現象を観察するために、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表4】に挙げる。

【表4】御所浦島方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	min miran	mita *mitta	min miran	mita *mitta
起きる	okin okiran	okita okitta	okin okiran	okita okitta
出る	den deran	deta *detta	den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表4】を見ると分かるように、まずA氏とB氏の分布状況は全く同じである。r 語幹化については、 i_1 , i_2 , e_1 語幹動詞で起こりやすいと考えられる。この中で最も r 語幹化しているものは、[okitta] <起きた> という形が現れることから、 i_2 語幹動詞であろう。従って、テ形音韻現象においては、 i_2 語幹動詞の場合に [te] しか現れないのではないかという予測が立てられるが、実際はB氏にのみその予測が当たっている。

母音語幹動詞については、その語幹が r 語幹化しやすいかどうかによってテ形音韻現象が異なるため、ここでは(3), (4)はそのままにしておく。

また、(3), (4)の X を弁別素性で表すと、各ルールは次のようになる。³

(5) e 消去ルール (御所浦島方言) :

$$e \rightarrow \emptyset / [-syl, +cor, -cont]^c] t _]$$

(6) e/i 交替ルール (御所浦島方言 (A氏のみ)) :

$$e \rightarrow i / [-syl, +cor, -cont]^c] t _]$$

ルール(5)を持っているということは、御所浦島方言 (A氏) は、真性テ形現象方言 (タイプ TA# 方言) であるということになる。また、ルール(6)を持っているということは、擬似テ形

³ ルールにおける弁別素性は、[syl]=syllabic (音節主音性)、[cor]=coronal (舌頂性)、[cont]=continuant (継続音性) をそれぞれ示す。また、記号^cは補集合 (complement) を表す。

現象方言（タイプPA方言）であることになる。ここでは、ルール(5)、(6)を両方とも持っていることから、両方言タイプの共生タイプであると考えられる。この方言が共生タイプであるということは、現時点までに報告されていない。新発見である。

一方、御所浦島方言（B氏）は、ルール(5)しか持っていないので、真性テ形現象方言（タイプTA#方言）であると考えられる。

4. 2. 獅子島方言

本節では、鹿児島県北西部の獅子島（鹿児島県出水郡長島町）方言のテ形音韻現象について記述する。

まず、インフォーマント2名分（仮に「A氏」「B氏」と呼ぶ）の言語データを【表5】に挙げる。

【表5】獅子島方言の動詞テ形

語 幹	A 氏	B 氏	意 味
kaw <買う>	ko:tekita *kokkita *ko:tʃikita	ko:tekita kokkita	買って来た
tob <飛ぶ>	tsu:dekita	to:dekita tsu:dekita tsukkita	飛んできた
jom <読む>	jondekita *jo:dekita	ju:dekita *jukkita *juŋkita	読んで来た
kas <貸す>	kafitekita *ke:tekita	kafitekita ?ke:tekita kekkita	貸して来た
kak <書く>	kaitekita *ke:tekita	kaitekita ʔke:tekita *kekkita	書いて来た
kog <漕ぐ>	ke:dekita	ke:dekita	漕いで来た
tor <取る>	tottekita	tottekita	取って来た
kat <勝つ>	katttekita	katttekita	勝って来た
sin <死ぬ>	ʃindekure	ʃindekure ?*ʃiŋkure	死んでくれ
mi <見る>	mittekita *mikkita *mitʃikita	mittekita *mittekita *mikkita	見て来た
oki <起きる>	okitekita okittekita	okittekita *okikkita	起きて来た

de <出る>	detekita dekkita	detekita dekkita	出てきた
uke <受ける>	uketekita ukekkita	uketekita ukekkita	受けてきた
i ~ it <行く>	*ikkita itakkita	*ikkita itakkita	行ってきた
ki <来る>	kitekure *kikkure	kitekure *kikkure	来てくれ
s <する>	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	ʃitekita *ʃikkita *sekkita	してきた

【表5】から分かるように、共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音の違いによって、次のような分布をしている。

【表6】獅子島方言のテ形音韻現象の分布

	獅子島方言			
	A	氏	B	氏
kaw <買う>	te			Q
tob <飛ぶ>	de			Q
yom <読む>	de		de	
kas <貸す>	te			Q
kak <書く>	te		te	
kog <漕ぐ>	de		de	
tor <取る>	te		te	
kat <勝つ>	te		te	
sin <死ぬ>	de		de	
mi <見る>	te		te	
oki <起きる>	te		te	
de <出る>		Q		Q
uke <受ける>		Q		Q
i ~ it <行く>	—	—	—	—
ki <来る>	te		te	
s <する>	te		te	

【表6】の子音語幹動詞及び母音語幹動詞の分布をまとめると、【表7】のようになる。

【表7】獅子島方言の子音・母音語幹動詞の分布

	A	氏	B	氏
[te], [de]	/w, b, m, s, k, g, r, t, n, i ₁ , i ₂ / のとき		/m, k, g, r, t, n, i ₁ , i ₂ / のとき	
促音	/e ₁ , e ₂ / のとき		/w, b, s, e ₁ , e ₂ / のとき	
[tʃi], [dʒi]	(なし)		(なし)	

【表7】の子音語幹動詞を観察すると、両氏とも促音が現れているので、真性テ形現象方言と考えられる。そこで、その分布から、次のようなルールを設定できる。

(7) e 消去ルール (獅子島方言) :

語幹末分節音が X でない動词语幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、テ形接辞 /te/ の /e/ を消去せよ。

X=/ w, b, m, s, k, g, r, t, n/ (A氏)

X=/m, k, g, r, t, n/ (B氏)

両氏とも真性テ形現象方言と考えられるため、同じ e 消去ルールを仮定することができるが、その適用環境は異なっている。

一方、母音語幹動詞においては、r 語幹化 (う行五段化) の現象が関連する。この現象を観察するために、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表8】に挙げる。

【表8】獅子島方言の一段動詞の否定形・過去形

	A 氏		B 氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	min miran	mita *mitta	*min miran	mita *mitta
起きる	okin okiran	okita okitta	okin okiran	okita okitta
出る	den deran	deta *detta	den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表8】を見ると分かるように、A氏とB氏の違いは [min] が適格であるかどうかである。しかし、いずれにしても r 語幹化については、 i_1 , i_2 , e_1 語幹動詞で起こりやすいと考えられる。この中で最も r 語幹化しているものは、[okitta] <起きた> という形が現れることから、 i_2 語幹動詞であろう。逆に、最も r 語幹化していないものは e_2 語幹動詞であろう。従って、テ形音韻現象においては、 e_2 語幹動詞の場合には促音が現れやすいのである。この考察は、テ形音韻現象の分布ともおおよそ合致する。

よって、ルール(7)は変更する必要がないと考えられる。

ルール(7)の X を弁別素性で表すと、各ルールは次のようになる。

(8) e 消去ルール (獅子島方言) :

$e \rightarrow \phi / [-\text{syl}]^c] t _]$ (A氏)

$e \rightarrow \phi / \{[-\text{syl}, +\text{cor}, -\text{cont}], [+nas], [+back]\}^c] t _]$ (B氏)

以上から、まず獅子島方言 (A氏) は、真性テ形現象方言 (タイプ TG 方言) と考えられる。

一方、獅子島方言（B氏）は従来発見されていない方言タイプである。そこで、この方言タイプを「真性テ形現象方言（タイプTD''方言）」と呼ぶことにする。

5. 方言タイプの整理

本節では、第4章で判明した方言タイプを、従来のものとともにまとめておく。

第4章で判明した方言タイプは、以下の通りである。

- (9) a. 御所浦島方言（A氏）：真性テ形現象方言（タイプTA#方言）
 =擬似テ形現象方言（タイプPA方言）
 b. 御所浦島方言（B氏）：真性テ形現象方言（タイプTA#方言）
- (10) a. 獅子島方言（A氏）：真性テ形現象方言（タイプTG方言）
 b. 獅子島方言（B氏）：真性テ形現象方言（タイプTD''方言）

方言タイプとしての新発見は(10b)の「タイプTD''方言」だけである。(9a)も共生タイプとしては新発見である。

現時点までに最新の方言タイプの類型は、有元光彦(2013: 51-52)である。そこでは、真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言の方言タイプをまとめているが、そこに今回の新発見を含めて一覧表にしておく。【表9】のようになる。⁴

【表9】真性・擬似テ形現象方言の方言タイプ

真性テ形現象方言	擬似テ形現象方言	X
TA	PA	XA=[-syl, +cor, -cont]
TA# (=TB)		
	PA#	
	PA##	
TA\$ (=TA')		XA' =[-syl, +cor, -cont], [+back, +voice]}
	PA'	
TC		XC=[-syl, +cor]
TD		XD=[-syl, +cor, -cont], [+nas]}
TD\$ (=TD')		
	PD'	XD' =[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+back, +voice]}
TD''	PD''	XD'' =[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+back]}
	PD'''	XD''' =[-syl, +cor], [+nas], [+back]}
TE		XE=[-syl, +cor], [+nas]}
TF		XF=[-syl, -cont]
TG	PG	XG=[-syl]

⁴ 先行研究に参照する便を考慮し、()内に旧名称を書き加えておくことにする。また、TA\$ (=TA')、TD\$ (=TD')という2つの方言タイプについては、「音節数条件」という別種の問題が絡むため、方言タイプからは外してもいいのではないかと考える。ただ、どの動詞語幹に、この条件が関係するのかについては、詳細な考察が必要である。

ここで、タイプ TD'' 方言と類似の方言タイプを、【表10】に比較しておく。⁵

【表10】類似の方言タイプの比較

	TD	TD''	PD''
w	Q	Q	tʃi
b	Q	Q	tʃi
m	de	de	de
s	Q	Q	tʃi
k	Q	te	te
g	Q	de	de
r	te	te	te
t	te	te	te
n	de	de	de
i ₁	Q/te	Q/te	te
i ₂			
e ₁			
e ₂			
i ~ it	te	te	te
ki	te	te	te
s	Q/te	te	te

【表10】から分かるように、タイプ TD 方言とタイプ TD'' 方言とは、現れる音声の種類は同じである。即ち、コアルールである e 消去ルールの出力 (output) が同じである。しかし、音声の分布は異なる。

一方、タイプ TD'' 方言とタイプ PD'' 方言とは、音声の分布は同じであるが、現れる音声の種類が異なっている。即ち、コアルールの適用環境が同じで、出力が異なっているのである。従って、両者の方言タイプにおけるコアルールは異なっている。タイプ TD'' 方言のコアルールは e 消去ルールであり、タイプ PD'' 方言におけるコアルールは e/i 交替ルールである。

6. 地理的分布

本節では、現時点までに判明しているテ形音韻現象の方言タイプを言語地図上にプロットすることによって、地理的分布を考察する。

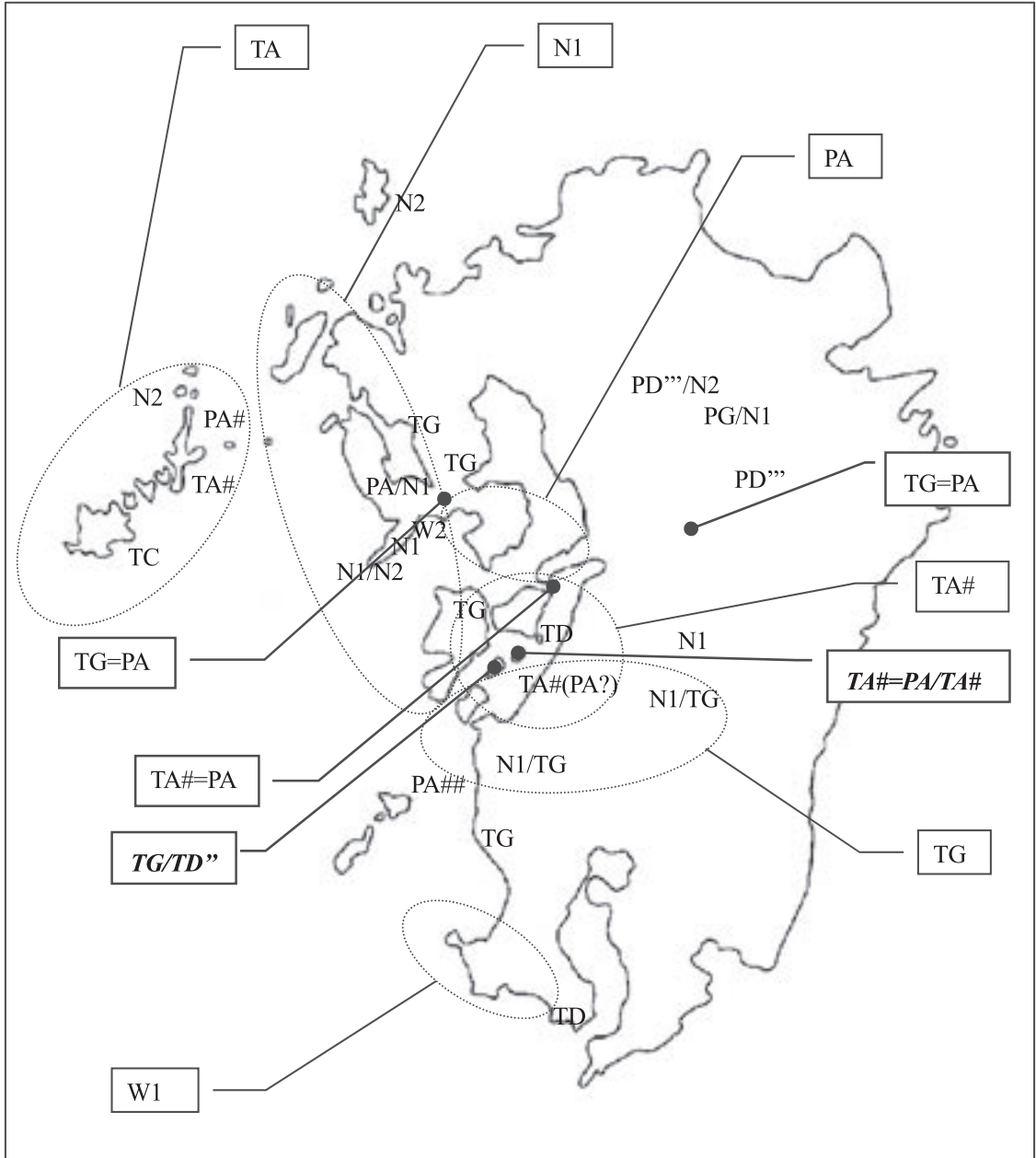
先行研究の中で最も新しい言語地図は、有元光彦 (2013: 53) のものである。⁶これに、本研究で判明した方言タイプを書き込むと、【図2】の斜体太字部分のようになる。ただし、細か

⁵ タイプ PD'' 方言は、長崎県南島原市加津佐町に見られる (cf. 有元光彦 (2007b: 44))。

⁶ 2014年3月時点で最も新しい言語地図は、有元光彦 (2014a: 70) である。しかし、ここには、まだ論文等で公式に言語データを示していないものがあつたり、記入漏れの箇所があつたりするため、不完全である。また、有元光彦 (2014a: 150) にも言語地図があるが、これは共生タイプの議論に特化したものであるため、本稿での論旨とは異なるものである。

い地理的分布については、有元光彦（2007a）などの先行研究を参照されたい。特に、長崎県島原半島や熊本県天草地域の分布に関しては、大きくグルーピングしてある。

【図2】では、記号 = は共生タイプを表す。記号 / は両方の方言タイプ（インフォーマントによって異なる方言タイプ）が観察されたこと、記号（ ）はその方言タイプの名残が見られることを、それぞれ表す。また、記号？は当該の方言タイプであるかどうか確定していないことを表す。



【図2】テ形音韻現象の地理的分布

【図2】から分かるように、御所浦島方言及び獅子島方言は、タイプTA#方言の大きな圏内に入っている。しかし、島嶼部ということもあって、特異な方言タイプが観察されている。特に、御所浦島方言では、共生タイプTA#=PAが現れている。本来共生タイプは、熊本県上天草市維和方言のように、タイプTA#方言圏とタイプPA方言圏が地理的に接触する地域に現れるが、御所浦島方言はそのような接触地域ではない。従って、島嶼部特有の現象であると考えられる。

また、獅子島方言のタイプTG方言に関しては、タイプTA#方言の南部に位置するタイプTG方言の大きな方言圏の中に入っている。一方、タイプTD”方言については、同じタイプは他には存在しない。類似の方言タイプであるタイプTD方言は、近隣では熊本県上天草市龍ヶ岳町樋島や熊本県天草市天草町大江に見られる。タイプPD”方言は、長崎県南島原市加津佐町に見られる。いずれも地理的には近い地域である。

7. タイプTD”方言の理論的示唆

【表9】では真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言だけを挙げた。これは、有元光彦(2013: 52)において、真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言がパラレルである可能性が述べられているからである。事実、本稿でも対応関係があるタイプTD”方言が発見されている。

さらに問題であることは、タイプTA方言とタイプTD方言に様々な派生タイプが存在していることである。今回発見されたタイプTD”方言は、構成的アプローチの枠組みでは「亜種」に属するものである(cf. 有元光彦, 2007b, 2010b)。亜種とは、有元光彦(2007b: 44)によると、「方言タイプ(“種”)に類似した、地域的な差を持つタイプ」とされ、「当該方言のコアルールが、XA～XGに何らかの弁別素性集合を和集合演算(または積集合演算)した集合を持つ」と仮定されている。

なぜタイプTA方言とタイプTD方言だけに亜種のような多種多様な方言タイプが存在するのであろうか。両方言タイプの共通点は、コアルールの適用環境に「[-syl, +cor, -cont]」という集合を含んでいることしかない。この集合の安定性については、有元光彦(2007a: 184)の次の仮説によって、しばしば述べられている。

(I) “均衡化”の仮説:

真性テ形現象・擬似テ形現象を引き起こす(音韻ルールの適用)環境は、[-syl, +cor, -cont]という集合で均衡化する。

このことから、タイプTD方言、厳密には適用環境XD={[-syl, +cor, -cont], [+nas]}はかなり安定しているのかもしれない。

ただ、有元光彦(2013: 52)では、適用環境XA=[-syl, +cor, -cont]とXG=[-syl]が、真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言の両方に現れることから、この点においてのみ両方言タイプは対称性を成すと考え、これら以外の方言タイプについては結論を保留している。例えば、タイプTD方言に関しては、次のような記述をしている。

- (II) 「一方、最も均衡性の高いXAと最も均衡性の低いXGの中間に位置するXDには、様々な変種があり、厳密な対称性を成しているとは言い難い。擬似テ形現象方言のD系列だけでも、PD’, PD”, PD””という3種類があることから、混沌とした状態になっている。ひょっとすると、この中間的な場合こそが非テ形現象化が盛んに起きているとこ

ろなのではないだろうか。この多様性の解明は非テ形現象化の本質を解く鍵となろう。」
(有元光彦, 2013: 52)

「非テ形現象化」については、ここでは保留するが、擬似テ形現象方言の D 系列を混沌とした状態と見ていることは、この記述から分かる。しかし、D 系列の適用環境に [-syl, +cor, -cont] が含まれていることから考えると、この集合の存在が多様性を生み出しているのではないかと推測できる。

このような天草諸島方言における多様性あるいは複雑性は、以前にも述べられていた。有元光彦 (2007a: 221) には、次のような記述がある。

- (13) 「天草地域は、西ルートと東ルートそれぞれにおける言語変化が行き着く“収束（収斂）点”である。しかし、収束（収斂）点だからといって、安定しているわけではない。均衡性（安定性）の観点から言うと、この地域の方言タイプが最も均衡化していない（不安定である）。実際、天草地域には様々な方言タイプや“亜種”が乱立しているのである。」

以上の議論を踏まえると、次のような仮説を立てることができる。

- (14) a. 集合 [-syl, +cor, -cont] は均衡性（均衡化）を生み出す。
b. 均衡（均衡化）集合 [-syl, +cor, -cont] は多様性（複雑性）を生み出す。亜種を生産する。
c. 亜種が多く生産されると、非テ形現象化が促進される。

(14a) は(11)の主張と論旨は同じである。(14b) は本稿での主張である。(14c) については、「非テ形現象化」に関する議論は尽くされていないため、単なる予測に過ぎないかもしれない。⁷

均衡（均衡化）集合 [-syl, +cor, -cont] の振る舞いについては、テ形音韻現象の類型論の問題とともに、別の機会に譲りたい。

8. おわりに

本稿では、御所浦島方言及び獅子島方言の動詞テ形音韻現象について記述してきた。ここでは、島嶼部ゆえに新たな方言タイプ、及び共生タイプが発見された。

また、理論的には、D 系列の方言タイプが適用環境 XD, XD', XD'', XD''' を持つように、なぜこんなにも多様に存在するのかという問題も生じた。この問題に解答するためには、均衡（均衡化）集合 [-syl, +cor, -cont] の振る舞いについて解明する必要がある。また、この問題は、構成的アプローチの理論のもとでは、「亜種とは何か」という問題にも通じる。さらに、全体的には、方言タイプの類型論に対する課題も残っている。「非テ形現象化」といった“方言崩壊ヒストリー”との関連付けも考慮しなければならない。

今後も記述と理論両面からのアプローチが求められる。

⁷ 亜種と非テ形現象化との関連については、有元光彦 (2007b: 44-45) に簡単な記述がある。

【参考文献】

- Archangeli, D. & D.T. Langendoen (eds.) (1997) *Optimality Theory*. Oxford: Blackwell Publishers.
- 有元光彦 (2005) 「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005年9月号 明治書院 pp.74-82.
- (2007a) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房.
- (2007b) 『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) (2) 「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」(No.16520281, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書.
- (2007c) 「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」九州方言研究会第24回研究発表会 (山口大学) ハンドアウト.
- (2007d) 「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」 社会言語科学会第20回研究大会 (関西学院大学) ハンドアウト (ポスター発表掲示用).
- (2007e) 「音韻論・生物学・構成的アプローチ—九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象—」『社会言語科学会 第20回大会発表論文集』 社会言語科学会編 pp.190-193.
- (2008a) 「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第57巻 第1部 pp.1-13.
- (2008b) 「再訪: 熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』(語学教育フォーラム 第16号) 大東文化大学語学教育研究所 pp.357-374.
- (2009) 「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第58巻 第1部 pp.15-31.
- (2010a) 「熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第59巻 第1部 pp.35-52.
- (2010b) 『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』 平成19~21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(No.19652941, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書.
- (2011) 「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第60巻 第1部 pp.25-38.
- (2012) 「共生タイプについて—九州西部方言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として—」 第12回広島・方言研究会 (県立広島大学) ハンドアウト, ハンドアウト別紙.
- (2013) 「タイプPD””, PG方言の発見—熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象—」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第62巻 第1部 pp.37-55.
- (2014a) 『九州方言におけるテ形音韻現象の記述的・構成的研究』 平成23~25年度独

立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究(C)「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」(No.23520554, 研究代表者:有元光彦)研究成果報告書.

- (2014b) 「音韻ルールの方言圏論」小林隆編 (2014), pp.189-207.
- 藤本憲信 (2002) 『熊本県菊池方言の文法』 熊本日新聞情報文化センター.
- 日高水穂 (2002) 「言語の体系性と方言地理学」『方言地理学の課題』 馬瀬良雄監修 明治書院 pp.165-178.
- (2008) 「方言形成における「伝播」と「接触」」『方言研究の前衛』 桂書房 pp.425-442.
- 飯豊毅一ほか編 (1983) 『講座方言学 9 九州地方の方言』 国書刊行会.
- 井上史雄 (2000) 『東北方言の変遷』 秋山書店.
- Kager, R. (1999) *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
- 小林隆 (2004) 『方言学的日本語史の方法』 ひつじ書房.
- (2012) 「方言形成論の到達点と課題—方言圏論を核にして—」『東北大学文学研究科研究年報』 第61号 pp.28-64.
- ほか (2008) 『方言の形成』(シリーズ方言学1) 岩波書店.
- 編 (2014) 『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』 ひつじ書房.
- 九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房.
- Newmeyer, F.J. (2005) *Possible and Probable Languages*, Oxford Univ. Pr.
- 大西拓一郎 (2008) 『現代方言の世界 (シリーズ現代日本語の世界6)』 朝倉書店.
- Prince, A. & P. Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Technical Report CU-CS-696-95. RuCCS-TR-2.[Published in 2004, Oxford: Blackwell Publishing]
- 沢木幹栄 (1996) 「語形伝播のシミュレーション」『言語学林1995▶1996』三省堂 pp.911-919.
- 澤村美幸 (2011) 『日本語方言形成論の視点』 岩波書店.
- 徳川宗賢 (1993) 『方言地理学の展開』 ひつじ書房.
- 屋名池誠 (2009) 「〔書評〕有元光彦著『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』」『日本語の研究』 第5巻3号 pp.132-138.